

桐が谷通信

CHUBU GAKUIN UNIVERSITY
CHUBU GAKUIN COLLEGE

第 5 2 号

2 0 1 5 年 7 月 1 日

発行 中部学院大学 宗教委員会
中部学院大学短期大学部

〒501-3993
岐阜県関市桐ヶ丘二丁目1番地 TEL (0575) 24-2211

「中部学院の最近のキリスト教活動について」

笠井 恵二 (中部学院大学 宗教主事・教授)

本学は「神を畏れることは、知識のはじめである」ということを建学の精神に掲げているキリスト教主義の学校である。母体の岐阜済美学院は、大学、短期大学、高校、二つの幼稚園、保育園を擁し、4000名近い児童・生徒・学生を教育する総合的な学院であるが、一貫してこの建学の精神が流れている。そのため、特色のあるさまざまなキリスト教に土台をおいた行事、催しが計画されている。とくに最近サークルともなったCCF聖歌隊が発展している。CCFというのは「中部学院クリスチャン・フェローシップ」の略であり、以前、活躍していたが一時消滅していたものが復活したと理解されている。

この聖歌隊が復活したいきさつは、ある先生から「なぜこの学校には聖歌隊がないんですか」と学生が言っていたということを知り、それならその学生を中心にして聖歌隊をつくってみようと思ったことから始まる。それで「チャペルの終わりの報告のときに、聖歌隊をつくりたいと思うので、興味のあるひとは申し出て下さい」と言ったら、参加したいという学生が出てきて、その人たちを中心にして始まったわけである。

そのうちの何人かは、すでに高校で聖歌隊をやっていたので、かなり上手にコーラスを歌うことができた。そして礼拝のときに聖歌隊が歌うと、それにひか

れてまた数人の学生が参加するようになり、間もなくサークルに昇格することができた。最初



はシャロームというグレースホールの横にある小部屋で練習していたのだが、次第に学生同士で誘い合って人数がどんどん増えてきて少し手狭になったので、先日からは、卓球サークルの部屋に同居して仲良く使わせてもらうことにした。練習や発表のとき、意外と上手に出来たと思うこともあるが、これではまだまだ人に聴かすような段階ではないと思うこともある。しかし上手に歌うことよりも、下手な人でも気軽に参加できるゆるやかなサークルであることが、一番だと思っている。だから、自信がなくても一緒に歌ってみたいと思うひとは、遠慮なく参加してもらいたい。

はじめは私も張り切って、モーツァルト、メンデルスゾーン、ハイドンなどの名曲を聴衆の前で演奏してみたいと思っていたが、最近では、余り高望みしすぎないほうが良いのだと思うようになった。だから聖歌隊の歌を聴かされる皆さんは（4ページ下段に続く）



中部学院クリスチャン・フェローシップ

チャペル・トークから～ 毎週月曜日には関キャンパスで、木曜日には両キャンパスでチャペルがもたれています。今号では、先日5月25日のチャペル・トークのタイジエスを掲載いたします。

「霊のたたかい」(エフェソの信徒への手紙6章10～12節)

日本キリスト改革派関キリスト教会 橋谷 英徳

どうして、この世の中には、こんなにも多くの争いが満ちているのでしょうか。誰もはじめから憎しみ合い、争うために結婚する男女はいないはずですが、むしろ愛し合うために結婚したはずなのですが、いつの間にか憎しみ争いあうようになってしまうことがあります。これは夫婦や家族の間だけのことでありません。個々人を超えた共同体でも、また国々の間にも同じことがみられます。いつの間にか、憎み合い、最終的には、殺しあうことにすらなるのです。今、世界はさらに深刻な様相を呈しているとも言えましょう。

私たちは今のこの時をどのように生きたらよいのでしょうか。ここで聖書が語っているキリストを信じて戦う、霊の戦いとはどのようなものなのでしょうか。

第二次大戦下、ナチスのホロコーストを逃れるために、大量のユダヤ人難民がフランスに流入して来るようになりました。そのような中、ル・シャンボンの村の人たちは、子供たちを中心に6千人以上のユダヤ人の難民を受け入れ、^{かくま}匿いました。当時の村の人口は約4千人でありましたから、村の人口を超える人々を匿ったこととなります。当時、このようにしてユダヤ人を守ることは、極めて危険なことでした。

村の人たちは、彼らの身の安全を保証し、寝る場所、食べ物を提供し、教育まで施しました。子供たちを人間として尊重し、暖かくもてなしたのです。多くの子供たちが、この村に来たときには深く傷つき、その魂を病んでいたのですが、ここに来て、人間への信頼を取り戻しました。さらに、ル・シャンボンの人たちは、ナチの人々を憎んだり、傷つけたり、殺したりということはなかったのです。ユダヤ人だけではなく、ナチの人々も愛の対象から除外されませんでした。

この働きの中心を担ったのが、村のプロテスタント教会でした。アンドレ・トロクメ牧師とエドワルド・タイス協力牧師が指導者でした。村の人たちの多くはこの教会の信者でありました。ル・シャンボンの教会は、伝統的なユグノーの村です。ユグノーとは、フランスのプロテスタント(改革派)の信者の呼び名です。プロテスタントはフランスでは圧倒的な少数者で、16世紀の宗教改革以後、激しい迫害にあったのです。このような歴史の記憶を持つル・シャンボンの村の人たちであったがゆえに、辱められているユダヤ人たちのことがよくわかったのでしょう。

村の人たちは、「どうして、あなたがたは危険を冒してまで、このようなことをしたのか?」と質問されると、たいいてい皆、同じように「なぜみんなそんなことを尋ねるのか? 私たちは当然のことをしただけで特別なことをしたわけではありません。聖書が言っていることに従っただけです」と答えています。旅人をもてなすこと、飢えた者、苦しむ者を助けることはキリストに従う者としては、当たり前なことだと言うのです。確かに、この村の人たちは特別な聖人というような人ではなく、ごく普通のどこにでもいる人々でありました。

1940年6月、フランスがドイツに降伏したその次の日曜日に、ル・シャンボンの教会で、トロクメは説教をしています。今日、お読みしましたエフェソの信徒への手紙の箇所からの説教でした。この日、このような説教の言葉を語っています。「暴力に対してのキリスト者の責任は、良心に従って、聖霊の武器(Weapons of the Spirit)によって戦うことです」。

トロクメ牧師について調べてすぐにわかることは、彼が理想主義者ではなく、徹底したリアリス



トであったことです。彼はどのような事柄にも、冷静に現実的に対処するすべを知っていました。彼は自分の教会の人々に「互いに愛し合うこと」を求め、キリストの言葉に従ってユダヤ人も、ナチも愛することを求めました。それもまた理想主義的にではなく、きわめて現実的な信仰に基づくものでした。

トロクメはナチのような魔性の力、その時代の暴力的な力に抵抗できるのは、聖書の証^{あか}するキリストの愛しかない^{あか}と堅く信じていたのです。そして、この村の教会のキリスト者たちは皆、説教を通して、神の言葉を聞き、信じてそれを実践したのです。そのようにして、ル・シャンボンの教会は、「血肉」と戦うことなく、霊の戦いを戦っ

たのです。

暴力的な力が再び頭をもたげつつある時代を私たちは生きています。キリスト教信仰というものは争いしか起こさないのでしょうか。私たちはもう何もすることはできないのでしょうか。決してそうではありません。何か大きなことではなく、神の言葉を聞いて、キリストの愛を信じて、そこに生きるとき、今日も私たちは霊の戦いを戦うのです。

(参考図書としては、フィリップ・ポ-ル・ハリ-『罪なき者の血を流すなかれ - ル・シャンボン村の出来事』石田敏子訳、新地書房、1986年があるが、現在絶版です。志村記)

「友情のエールは賜物」～ランチタイム・カラオケに集って～

幼児教育学科 岡田 泰子

5月13日のお昼休みは、いつものグレースホールが熱気ある空間に包まれていました。カーテンが閉められ、電飾ステージと採点つき迫り映像が流れるスクリーン。受付ではどの馬が栄冠を勝ち取るか予想し!? 応援馬券が配られ、今から何が始まるのかと意外な光景に興味津々でした。

ヒガ先生率いられる、歌の大好きな六頭の出走馬たち(笑)がお気に入りのナンバーを次々と披露。出走(出演)の皆さんは、馬に扮し、誰もが人前に動じることなく思う存分歌い上げ、客席では、大勢の友人らが声援を送る微笑ましい光景。時に面白おかしく、でも真剣勝負のステージを

して、学生の皆さんの、内に秘めたるエネルギーの発露を実感し、嬉しく集わせていただきました。折しも出演者のひとり、幼児教育学科から四大編入されたAさん。1番予想が的中し、喜びもひとしおでした。

友情のエールに支えられてのひととき、心和む時間を有難うございました。



「奇跡の一枚」クリスマス献金の報告と共に

短期大学部宗教主事 志村 真

本学では毎年、クリスマスの時期に献金を募り、国内外の被災地や福祉施設などに送ってきました。その中から、筆者が関係しているスリランカの「ジョセフ記念教育プログラム」にも献金をいただいています。そこで、お礼も兼ねてこの教育プログラムについてご報告したいと思います。

スリランカという国はインド洋に浮かぶ島国で、大きく言って3つの民族(シンハラ人、タミル人、モスリム)と4つの宗教(仏教、ヒンドゥー教、

イスラーム教、キリスト教)が共に暮らしています。けれども、1983年から2009年までの26年間、民族間の対立から内戦に苦しみました。内戦で命を奪われた人は恐らくは10万を超え、また何十万もの人々が難民として他国に逃れました。

内戦は2009年5月に「終結」しましたが、政府軍による武装勢力の軍事的制圧によるものでした。民族間にはわだかまりが残されたままです。

2004年12月26日、「スマトラ沖大地震&インド洋大津波」が発生し、スリランカでも約4万人の死者を出すなど、甚大な被害を受けました。地震直後、筆者は親交のあったR. ジョセフ教授（ランカ神学大学）の故郷、東部パティカロア市の被災地に緊急義援金を送り、小規模の支援活動を始めました。

その後、被害の大きかったナーワラディ地区に保育所を建てて運営する計画を立てましたが、現地での調整がうまくいかず、方向を教育支援に切り替えました。

具体的には、津波被災地の東部（最初はパティカロア市、現在はカルムナイ町）と、やはり貧困に苦しむ中央丘陵地帯の紅茶畑労働者の子どもたち（最初はハットン市、現在はキャンディ市とブッセラワ町）40人に補習授業の提供を始めました。（2007年1月から実施）貧富の差がそのまま教育格差につながっているスリランカでは、有料の補習授業を受けるか受けないかで、進学に決定的な差が出てしまいます。そこで小規模ですが、40名の中学生に英語と数学の授業を提供しています。

2007年5月にジョセフ教授は急逝されましたが、奨学金プログラムはお連れ合いのAM. ジョセフ女史を通じて継続されています。現在支援くださっているのは、ジョセフ・ファミリーのほか、加茂郡白川町にある蘇原教会、光の子保育園、本学からはクリスマス献金と短期大学部の先生方、社会福祉学科の稲垣ゼミ、経営学科の網野ゼミなどの大学祭の売り上げ、そして附属桐ヶ丘幼稚園の先生方などです。

ここで一枚の写真をじっくり見てみましょう。



「奇跡の一枚」(キャンディ聖パウロ教会にて)

今年の2月にキャンディ市の聖パウロ教会で撮られたものです。奨学金を受けている子どもたちとご家族が集まって、学習発表会と表彰式を行った際の集合写真です。頭を覆う布ヒジャブを着けている女子生徒がいますね。中には黒をまとっている子もいます。イスラーム教徒の生徒たちです。実はこの集合写真には、スリランカにある主要宗教すべての子どもたちが写っているのです。これはある意味で奇跡的なことです。キリスト教会にイスラーム教徒の子どもたちとご家族が来てくださり、表彰式に臨んでスピーチをしてくれたことは大変意義深いことだと思います。

この教育プログラムは元々、少数民族タミル人の支援のために始められたので、多いのはヒンドゥー教徒、そしてキリスト教徒とイスラーム教徒です。けれども、昨年までの写真にはいなかった多数民族シンハラ人の仏教徒の子どもも参加するようになり



東部カルムナイ町の小学校にて

になりました。それにはいきさつがあります。今年になって、タミル人であるジョセフ女史たちが「シンハラ人の貧しい家庭の子どもにも奨学金を上げよう。貧しいということでは同じなのだから」と言ってくださり、支援の対象が全民族に広がりました。

実は彼女は内戦の最中、娘を二人失う経験をしておられます。一人は栄養失調、もう一人は軍用トラックにはねられて。その悲しみの中で、他民族に対する微妙な感情を持っておられたのですが、それを乗り越えて、ついにプログラムを全民族・全宗教に広げられました。そのことを感動をもってご一緒させていただいています。

(1ページから続く)ときには下手だなあと思うことがあっても、中部学院の精神で、寛容に、おおらかに受け容れていただければ幸いである。クリスマスには大曲をと思っはいるが、それは不可能かもしれない。しかしささやかではあっても、ひとを慰め癒す音楽への感動と、作曲したひとびとの信仰のほとばしりを少しでも感じていただければ幸いである。